

やち 野地遺跡 第2次発掘調査現地説明会資料

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
平成22年8月14日(土)

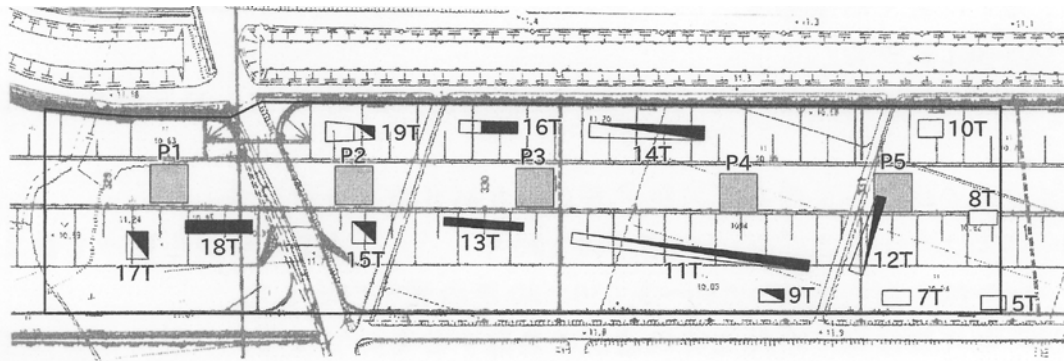
1 はじめに

胎内市大字八幡地内の日本海東北自動車道用地内において、新潟県教育委員会の依頼を受け野地遺跡の第2次発掘調査を7月5日から開始しました。

平成13年に遺跡の有無を調べる試掘調査を実施し、15,500㎡の広さに複数層の生活の痕跡を発見しました。その時は縄文時代の建物の木柱やクルミ殻などの捨て場等を検出しましたが、記録を取った後、埋め戻しました。柱などは空気に触れたために腐食が心配されることから、柱などを回収するための発掘調査を行っています。

2 調査の概要

試掘調査では5か所の試掘溝で柱や堅果類の集積を把握しました。今回はそのうち2か所(13Tr.と18Tr.)の合計242㎡の発掘をしています。



18Tr. の調査

検出した柱 = 6本 (Pit1~6)

柱はH3d層と呼ぶ暗褐色粘土の上面で検出できます。これは縄文時代晩期前葉後半(今から約3,000年前)に形成された層です。

P1と呼ぶ大きな柱は海側に傾いています。これは柱が洪水を受けて、斜めになったものと見られます。洪水の圧力で柱が傾いた際に、周辺に堆積した土を変形させています。その時点では柱が建物として機能していたかは、不明です。

果類集中か所 = 1か所

H2層に含まれる堅果類で、柱よりは上層にあります。洪水で急速に堆積したと考えられ、時期差はあまりないと考えています。クリが多い地点やトチが集中する所など、時季ごとの皮むき作業の様子が窺えます。



横倒し材=1本

長さ 5.9 ㍎、最大径 0.6 ㍎のクリ材です。上面は平らですが、工具の痕が良く見えないので、加工材かは今のところ不明です。胎内川に傾斜する地点に据えられたようにも見られ、水場の利用に関係するものかもしれません。このクリ材は切らずに新潟県埋蔵文化財センターに運び詳しく調べます。

H 5 と呼ぶ縄文時代晩期前葉前半の層に含まれ、柱よりは古い層にあります。

土 層

第 1 次調査の P 1 区の堆積を参考にできます。生活面は 7 層に分層でき、更に細分も可能です。全て縄文時代晩期に堆積したものと見られます。上から(新しい層)順に H 1 ~ H 7 (H は遺物包含層の意味)、そこに砂の間層が入ります (k 1 等と表現)。

- ・ H 1 ~ H 4 は縄文時代晩期前葉後半の土器が出土します。 大洞 (おおぼら) BC2 式併行
- ・ H 5 ~ H 7 は晩期前葉前半
大洞 B2~BC1 式併行

検出標高は H 1 が約 9.25 ㍎、H 3 d (柱検出面) が 8.75 ㍎、H 5 が 8.65 ㍎です。

年 代

第 1 次調査ではクルミ殻などの年代測定 (AMS 法) を行いました。

H 1 ~ H 4 は今から 2,930±30~2,950±30 年 (1950 年から遡って数えます)

H 5 ~ H 7 は今から 2,970±30~3,030±30 年の値が出ました。

(この年代値は全ての縄文時代遺跡に共通するものではなく、遺跡によって若干の差があるようです。)



野地遺跡の第 1 次調査結果の要約 (前回の調査)

- 1 平成 17 年 5 月~18 年 2 月。日東道橋脚 5 か所 (1 か所 90 m²×5) 調査。
- 2 遺跡は簡易ボーリング調査で八幡集落側へ延びる。
- 3 建物が少ない一方、廃棄や燃焼に関わる遺構が多いことから、集落の縁辺部にあたるとみられる。
- 4 遺構は掘立柱建物 1 棟、平地住居 1 基、竪穴状遺構 2 基、土坑墓 4 基、土坑 46 基、埋設土器 1 基、堅果類集中範囲 39 か所、焼土・炭化物集中 70 基。
- 5 墓坑 4 基のうち 2 基から人骨を検出した。3 基の墓の底面には板材が敷かれていた。
- 6 クルミ塚・トチ塚などの堅果類集中範囲やニワトコ・ヤマグワなどが廃棄された地点が多数あった。大規模かつ多種類の植物利用が窺える。
- 7 赤漆を施した土器が多く出土した。漆濾し布も出土し、高度な漆の利用が分かった。
- 8 胎内川右岸では、野地・道端・昼塚・道下の 4 遺跡が 4 km 圏内にある。野地遺跡は最も長期間継続する集落で、本遺跡の衰退と共にこの地域から縄文遺跡が一斉に消滅する。4 遺跡は相互に関係し、規模と内容に優れた野地遺跡は拠点的な集落であったと推定される。